

《眼科臨床エキスパート》 網膜変性疾患診療のすべて

吉村長久, 後藤 浩, 谷原秀信 シリーズ編集 村上 晶, 吉村長久 編

網膜ジストロフィの多くは遺伝性, 進行性の視機能障害を生じる。網膜色素変性を除けば比較的まれな疾患が多く, ほとんどが治療のない疾患ということもあって, 多くの眼科臨床医にとっては興味の対象になりにくい分野かもしれない。

しかし近年の分子生物学の進歩や, OCT をはじめとする眼底イメージングの発達により, 個々の疾患の病態の理解が, 以前に比べると格段に深まってきた。近い将来, 正確な診断に基づいた特異的な治療法が開発されるようになるのではないかの期待も抱かせる。さらなる発展を支える研究者には細胞レベル, 分子レベルで捉えた, 網膜に関連する基礎医学的知識が必要になる。

本書の総論には解剖学, 生理学, 生化学, 遺伝学など, 網膜ジストロフィを理解するための基本的な知見が, 比較的わかりやすく解説されている。特に視物質代謝の生化学機構である visual cycle と視覚の分子メカニズムである phototransduction は網膜色素変性の病態理解のためには必須の内容で, これがわかりやすい図を使って説明されている。評者のように近年のこれらの進歩を聞きかじりで不正確に理解してきた眼科医にとっては, 体系的に勉強し直すことができてためになる。

網膜に関する基礎医学的解説に引き続いて, 網膜変性の病態に関するさまざまな最近の分子病理学的仮説が, 網膜色素変性を主な対象として解説されている。最新の論文のイントロダクションやディスカッションを精読して得られるような知識がまとまっていて助かる。網膜色素変性眼の進行例では, 杆体消失後, 脈絡膜由来の酸素濃度が上昇し, 活性酸素による細胞傷害メカニズムで錐体細胞死を誘発するという

酸化ストレス説が, まず紹介されている。次いで欧米に多いロドプシンの P23H 点突然変異の網膜色素変性では, 蛋白の三次元構造の異常を示す異常なロドプシン分子が蓄積し, その修復機序である小胞体ストレス機構が破綻することで視細胞死を生じる仮説が解説されている。その他, 内節/外節を連絡する connecting cilium に関する ciliopathy や慢性炎症, カルシウムイオン濃度の上昇, 網膜光障害などが網膜色素変性の治療候補との関連で解説されている。

総論では, 引き続いて視力/視野/眼底検査, 電気生理学的検査, OCT, 眼底自発蛍光, 補償光学 SLO など, この分野では必須の診断機器による検査法が解説されている。また小児の診療のこつやロービジョンケア, 遺伝カウンセリング, リハビリテーション, 告知, 就学就職相談など, 実際の診療で知っておいたほうがよい知識が解説されている。

AZOOR, ビタミン A 欠乏症, 心因性視覚障害, 薬剤性網膜障害, 癌関連網膜症, 悪性黒色腫関連網膜症 (MAR) など, 網膜ジストロフィと間違えやすい疾患についても解説されている。総論の最後に現行の治療と今後期待される薬物, 遺伝子治療, 再生医療, 人口網膜などの治療法の解説がされている。

全体を通すと総論と各論の間の連絡が必ずしも十分ではなく, やや冗長な印象もあるが, 内容豊かな 1 冊となっている。

山梨大教授・眼科
飯島裕幸

B5・頁 408 2016 年 11 月
定価: 本体 17,000 円+税
[ISBN978-4-260-02801-1] 医学書院刊